

# 生業形態からみるコリヤーク語とエスキモー語の

## 語彙的接辞の比較考察

呉人 恵

(富山大学人文学部)

### 1. はじめに

本研究は、シベリア北東部に分布するコリヤーク語 (Koryak) とエスキモー語 (Eskimo) に見られる語彙的接辞 (lexical affixes) に関する比較を、生業形態の共通点と相違点という観点からおこなうための予備的試みである。

語彙的接辞とは、具体的かつ実質的な意味を表す接辞を指す。通常、語を形成する語幹は語の実質的な意味を、接辞は機能的な意味を表すのが一般的である (たとえば、歩イータにおいて、歩イという語幹は動詞的概念を、一タは過去時制を表す)。しかし、その一方で、具体的な動詞的あるいは名詞的意味を表す接辞を持つ言語も散見される。シベリア北東部に分布するコリヤーク語とエスキモー語はその一例である。両言語は、動詞的な意味を表す接辞をもつ点で共通している。本研究では、両言語の語彙的接辞を比較し、基本的な動詞概念や生業形態と関連する共通の接辞が見られるなどの類似性に着目し、相互の影響関係を示唆する。

考察にあたっては、コリヤーク語の語彙的接辞に関する拙稿 (呉人 2001:101-124) を踏まえながら、これを補充する資料の収集ならびに調査を各地でおこなった。コリヤーク語の資料は国立民族学博物館図書館で、エスキモー語の語彙的接辞に関する資料は北海道大学図書館で入手させていただくことができた。また、コリヤークとエスキモーの生業に関する民族資料は北海道立北方民族博物館の常設展ならびに収蔵庫で閲覧させていただくことができた<sup>1</sup>。記して感謝の意を表したい。

---

<sup>1</sup> これらの調査にあたっては、特に小長谷有紀 (国立民族博物館教授)、津曲敏郎 (北海道大学教授)、笹倉いる美 (北海道立北方民族博物館学芸員) の各氏に協力していただいた。

## 2. コリャークとエスキモーの言語と生業

シベリア北東部に分布するコリャーク語とエスキモー語は、系統も類型も異なる言語である。前者はチュクチ・カムチャツカ語族に属し、後者は正確にはシベリア・ユピック(Siberian Yupik) と呼ばれ、エスキモー・アリュートル語族に属する<sup>2</sup>。チュクチ・カムチャツカ語族の中で、コリャーク語はカムチャツカ半島の北部からオホーツク海を挟んで大陸側に分布する。一方、エスキモー語は、ベーリング海峡をまたいで、アラスカとシベリア北東にあるチュコトカ半島の先端部に分布する。フォーシス (1998:87-93) によれば、17世紀ロシア人の進出以前には、シベリア・ユピックは極北の沿岸に沿って東のコリマ川河口から太平洋沿岸を南西に沿ってアナディリ川まで広がっていた。その隣にはチュクチが居住し、さらに、アナディル湾から南にカムチャツカ半島付け根からオホーツク海北岸付近まではコリャークが居住していた。シベリア・ユピックはもっぱら海岸部で暮らし、海獣猟に従事していた。一方、チュクチとコリャークは海岸部に定住して海獣猟や漁労に従事する海岸定住民と、内陸部でトナカイ遊牧に従事するトナカイ遊牧民という2つのグループに分かれる。筆者が対象としてきたのは、このうち、トナカイ遊牧民であるが、彼らの居住地域では冬は  $-50\sim-60^{\circ}\text{C}$  にまで下がる酷寒の厳しい気候条件のゆえに、トナカイ遊牧という単一の生業のみに依存することはあまりにも危険である。そこで、彼らは漁労、植物採集、狩猟などの複数の生業を組み合わせることにより、多様な自然資源を万遍なく利用しながら常に食糧確保が可能な状況を作り出すことにより、苛酷な自然条件に適応対処してきた。

エスキモー、チュクチ、コリャークは、民族的、言語学的にも相違していたにもかかわらず、特に沿岸部の住民の生活スタイルや世界観は相互に多くの共通点を持っていたことが指摘されている(フォーシス 1998:90-91)。また、Krupnik (1993) によれば、これらの民族はすべて arctic subsistence を持つ点でも共通している。言語的にも相互に影響関係があったことが推測される。

筆者は、残念ながら、海岸定住民コリャークのコリャーク語に関する情報を持ち合わせていない。とはいえ、トナカイ遊牧民のコリャーク語(チュヴチュヴァン方言)に見られる語彙的接辞にも、エスキモー語のそれと共通する部分がある。また、その一方で、生業の違いを反映してエスキモー語には見られないものもあり、両者の比較は興味深い問題を提示する。

---

<sup>2</sup> シベリアに分布するチュクチ・カムチャツカ語族、エスキモー・アリュートル語族、ユカギール語、ニヴフ語、ケット語は、相互に系統も類型も異なるが、「古アジア諸語」と包括的に呼ばれる。これは、この地域にアルタイ諸語やウラル語族が進出する以前に話されていたシベリア生え抜きの言語という歴史的、地理的な理由によるものである。

### 3. コリヤーク語の語彙的接辞

コリヤーク語の語彙的接辞（以下、NV 接辞）には、①他動詞目的語を表わす名詞語基に付加される -u「食べる、飲む、（野生動物を）殺す」、-ŋəjt「刈る、狩る」、-ŋta「取りに行く」、-ŋel「（主に植物資源について）採りに行く」、-yijke「トナカイを橇牽引用に捕まえる」、-yili「探す、捜す」、-tve「脱ぐ、外す、剥がす」、te-.-ŋ「作る」、②自動詞主語を表わす名詞語基に付加される -ntet「外れる、脱げる」、-tuje「ほぐれる、ほどける」、-juŋ「（自然現象について）始まる」、さらには③手段を表わす名詞を語基に持つ-lŋet「・・・で行く」、-tku「・・・で作業する」、④方向を表わす名詞を語基に持つ-jt「・・・に行く」などがある。

他動詞目的語を表わす名詞語基に接尾する NV 接辞によって作られる出名動詞は受益者をもたない場合、常に主語のみが標示される自動詞活用する(1)。

#### (1) t-ett-ə-ŋta-k-Ø

1 単主-氷-挿入-取りに行く-1 単主-過去

「私は氷を取りに行った」

出名動詞は、次の2つの構文において、動詞に主語、目的語のいずれもが標示される他動詞活用をする。すなわち、その1つは他動詞目的語に相当する所有名詞句あるいは関係名詞句の主部のみが NV 接辞と結合して出名動詞を形成し、一方、属部は絶対格を取ってその出名動詞の外側に残り残される stranding が起こる場合 (2)、もう1つは自動詞文では与格で表される受益者が絶対格を取るいわゆる充当相 applicative の場合 (3) である。

#### (2) yəmnan kəmiŋ-ə-n t-ə-li-tvə-n-Ø

私(能) 子供-挿入-絶単 1 単主-挿入-手袋-外す-3 単目-過去

「私は子供の手袋を外した」

#### (3) yəmnan en'pic-Ø t-ə-qoja-yijke-n-Ø

私(能) 父-絶単 1 単主-挿入-トナカイ-捕まえる-3 単目-過去

「私は父のために（乗用の）トナカイを捕まえた」

コリヤーク語ではさらに、単一名詞語幹のみならず、名詞句あるいは異なる意味関係を有する複数の名詞語幹による出名動詞の形成も可能である(4)(5)。

#### (4) t-ə-t-el'ŋa-paŋka-ŋ-ə-k-Ø

1 単主-挿入-作る-女-帽子-作る-挿入-1 単主-過去

「私は女の帽子を作った」

(5) t'ə-ktep-ŋaly-ə-t'icf-ə-ŋ-ə-k-Ø

1 単主-挿入-野生羊-毛皮-挿入-作る-毛皮服-作る-挿入-1 単主-過去

「私は野生羊の毛皮で毛皮服を作った」

興味深いのは、これらのNV接辞の中にはトナカイ遊牧民コリヤークが當んでいる生業活動に結びついたものがいくつもあることである。たとえば、植物採集にかかわる{-ŋel}「(主に植物資源を)採りに行く」、狩猟やフィッシングにかかわる{-u}「食べる、飲む、(野生動物や魚を)殺す」、{-ŋəjt}「刈る、狩る」、さらにはトナカイ遊牧にかかわる{-yijke}「(トナカイを)橇牽引用に捕まえる」などである。

語幹に拠らなければその意味や機能を表わしえない接辞は、おそらく自立語に比べると他の言語から借用されにくいにちがいない。言い換えれば、それだけに古くからその言語固有の形態素として使われていたと推測することができる。コリヤーク語でそのような固有な形態素のひとつであるNV接辞によって、多様な生業活動が表わされているということは、そのような複合的な生業のありようそれ自体の古さを反映しているとも考えることができよう。ちなみに、佐々木(1992:156)では、苛酷な自然環境に生きるシベリアの多くの民族において、単一の生業に依存する危険性を回避するため、複数の自然環境とそれに適応した複数の生業を組み合わせた多層的な文化が形成されてきたことが指摘されている。

#### 4. エスキモー語の語彙的接辞

Jacobson(1987:269-308)であげられているエスキモー語(シベリア・ユピック語)の接尾辞の中から、コリヤーク語同様、名詞語幹に接続し、動詞を形成する語彙的接尾辞を拾うと、以下のような形式が得られる。

- +agh-                    'to catch N(oun)'  
e.g. naughaghtuq 'He caught a polar bear.'
- +niigh-                    'to hunt for N, to search for N'  
e.g. qawaagniightuq 'He is hunting walrus.'
- +yugh-                    'to hunt N'  
e.g. kaviivhyagtiq 'He is hunting fox.'
- +saghtugh-                'to hunt N'  
e.g. neghsaghsaghtughtuq 'He is hunting seals.'
- ghpagnite-                'to smell of N'  
e.g. anaghpagnituq 'It smells of excrement.'
- ghquute-                 'to encounter N'  
e.g. qanighquutuq 'He encountered snow.'

-ksagute-	‘to have N’
	e.g. mangteghaghllalguuq ‘He has a big house.’
-li-	‘to make N’
	e.g. angyaliiq ‘He made a boat.’
-ngllagh-	‘to make N’
	e.g. mangtedhangllaghtuq ‘He is making a house.’
-ligh-	‘to provide with N’
	e.g. aghalighaa ‘He gave her medicine.’
-liigh-	‘to prepare N, to cook N’
	e.g. aghveliightuq ‘He is cooking whale.’
+tugh-	‘to eat N’
	e.g. ayveghtughtuq ‘He ate walrus.’
-liqe-	‘to deal with N’
	e.g. kaviiliiquq ‘He is dealing with foxes.’
+nite-	‘to taste of N’
	e.g. taghyughnituq ‘It tastes salty.’
+si-	‘to work on N’
	e.g. angyaghsiiq ‘He is working on a boat.’
-nge-	‘to acquire N, to get N’
	e.g. qikminguq ‘He gets dogs.’
+si	‘to acquire lots of N’
	e.g. nutasiinga ‘I am getting lots of land.’
+sigh-	‘to get lots of N, to gather lots of N’
	e.g. quugsiightuq ‘He gathered lots of wood.’
+tagh-	‘to fetch N, to gather N’
	e.g. meghtaghtuq ‘He is fetching water.’
+te-	‘to go to N, to catch N’
	e.g. kiiwhtuq ‘He went to the river.’
-lgigh	‘to travel using N’
	e.g. qikmilgihtug ‘He went with dogs.’
+ti-	‘to speak the language of N’
	e.g. Yupigtiq ‘He is speaking Yupik Eskimo.’
+vagh-	‘to go N-wards’
	e.g. sivuvaghtuq ‘It went forward.’

以下では、両言語で共通する語彙的接辞を比較のために並べて表に示す。

表：エスキモー語とコリヤーク語で共通する語彙的接辞

	エスキモー語	コリヤーク語
(a)狩する／捕まえる	+agh-, +yugh-	-ŋəjt
(b)捜す	+niigh-	-yijlik
(c)～を取ってくる, 集める	+tagh, -ghqu-	-ŋta, -ŋel
(d)作る	-li-, -ngllagh-	te-.-ŋ
(e)食べる	+tugh-	-u
(f)～に行く	+te, +yagh-	-jt
(g)～で行く	-lgigh-	-lŋet

4節であげた例から明らかのように、語彙的接辞の数はエスキモー語の方が多い。また、表からもうかがえるように、同義接辞がエスキモーには多いのに対し、コリヤーク語ではひとつの意味にはひとつの接辞が対応している。これは恐らく、エスキモー語が語形成の手段としてもっぱら接尾辞を利用するのに対し、コリヤーク語では接辞以外に語幹合成の生産的な手段である抱合 (Incorporation) がおこなわれることとも無関係ではないであろう。

さらに興味深いのは、コリヤーク語に見られる①他動詞目的語を表わす名詞語基に付加される語彙的接辞、③手段を表わす名詞を語基に持つ語彙的接辞、④方向を表わす名詞を語基に持つ語彙的接辞がエスキモー語でも同様に見られることである。②自動詞主語を表わす名詞語基に付加される語彙的接辞の例は今回は拾うことができなかったが、より広範かつ詳細な調査により、これらも上がってくる可能性が高い。

表にあげられた共通する接辞の中には、「作る」や「食べる」などの基本的な意味を表わすものとともに、生業と関係するものも見られることにも注目したい。すなわち、(a)(b)は狩猟や漁労とのかかわりのある接辞であるし、(c)は採集とかかわっている。系統の異なる両言語の間に、なんらかの影響関係のあったことが推測される。一方、興味深いのは、コリヤーク語ではトナカイ遊牧を反映して-yijke「トナカイを橇牽引用に捕まえる」という語彙的接辞があるのに対し、トナカイ遊牧やトナカイの乗用としての利用が見られないエスキモーには、それがみられないことである。

## 5. おわりに

以上、コリヤーク語とエスキモー語の語彙的接辞の中には、生業を反映して共通するものが見られること、また、生業の違いが反映され、コリヤーク語にはあるがエスキモー語にはない接辞があることなどが明らかになった。ただし、本研究は、両言語の語彙的接辞の比較研究の第一歩であり、今後、両言語の語彙的接辞の形態統語的ふるまいの詳細な検討などを通して、影響関係の有無についてもより実証的に探っていきたい。まずは、本研究を通してその基礎作業をおこなった次第である。

### 【参考文献】

- 呉人恵 (2001)「コリヤーク語の出名動詞と名詞抱合」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』第7号(「環北太平洋の言語」成果報告書シリーズ A2-002), 101-124.
- 呉人恵 (2009)『コリヤーク言語民族誌』(北海道大学出版会)
- 佐々木史郎 (1992)「シベリアの生態系と文化」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学』(アカデミア出版会), 133-160.
- フォーシス, ジェームス (1998)『シベリア先住民の歴史 ロシアの北方アジア植民地 1581~1990』(森本和男訳)(彩流社)
- Jacobson, Steven, A. (1987) *A Dictionary of the St. Lawrence Island / Siberian Yupik Eskimo Language, Second Preliminary Edition*, Alaska Native Language Center, College of Liberal Arts, University of Alaska, Fairbanks.
- Krupnik, Igor (1993) *Arctic Adaptations: native whalers and reindeer herders of northern Eurasia*, University Press of New England.
- Schweitzer, Peter, P. (1999) The Chukchi and Siberian Yupik of the Chukchi Peninsula, Russia, in R. B. Lee and R. H. Daly (eds.), *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers*, Cambridge University Press, 137-141.